



TITLE:

工学部原子核工学図書室・石油化学 図書室紹介

AUTHOR(S):

CITATION:

工学部原子核工学図書室・石油化学図書室紹介. 静脩 1970, 6(5): 6-6

ISSUE DATE:

1970-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36570>

RIGHT:



工学部・教室図書室

原子核工学図書室

工学部1号館3階にある本図書室は昭和32年発足当初は教室自体が間借生活をしていましたが、34年から3期に分け教室固有の建物が完成し図書室も次第に存在を明らかにするようになった。現在は1号館初期の3倍の広さになり、年間予算も倍増して70万円となったが、60%は雑誌代に費している。研究用図書は講座が購入する方針だったので基礎的な本が多く、教室の構成が物理系を含むので外国物理学会の刊行物等があり他からの利用も多い。

広さこそ3倍になったが図書室用に造られた部屋ではなく煙突等のため壁面の利用は制限され、また情報化時代で雑誌の発行頻度種類もふえてスペースを捻り出すのに苦労しているが、学生数147名のミニ教室ではほとんどの人が研究室に机を持っているのを幸い教室全体が閲覧室であるという解釈で貸出規定はない。これは、図書室にある図書は、全教室蔵書数6,100余冊の中の約15%（雑誌についても和洋68種中の17種だけ）であるという現況に裏づけられてもいる。利用は完全開架式で借出し、返本とも利用者各人の良心に従って行なうことを原則としているが亡失その他のトラブルはほとんどない。

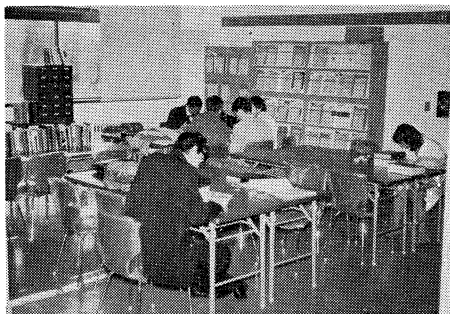
今後の課題としては目録の充実—誰もが手軽に目的の文献を探索できる—を最重点目標としているが職員1人では思うようにははかどらない。また図書室としての機能

をよりよくはたすために部屋の構造と設備の改善を掛としては望んでいる。

石油化学図書室

石油化学図書室は、昭和14年4月当教室が燃料化学教室として創設と同時に設立され、時計台西側の赤レンガ建物の一隅を占めていたが、このたび（昭和44年11月）工学部9号館の竣工と同時にその2階北西の隅に移り、現在ようやく閲覧のできる状態に整った。書庫閲覧室を合わせた総面積は112.5平方米、これに加えてコピー室が隣接しており、ゼロックス、電子リコピー、湿式複写器などの設備が整えられている。蔵書数は約5,000冊、購入雑誌は和洋合わせて68種年間図書費は約250万円である。利用形態は開架式であり閲覧者は自由に書庫に出入できる。職員は1名であり、目録体系は教室独自の方法を用いているため利用者に御迷惑をおかけしていることも多いと思う。

当図書室は単行本が蔵書の1/3を占めているので他教室からの利用者も多い。昭和26年の火災による焼失のため雑誌類は、1940年以降の新らしい年代のものが主となっている。



石油化学図書館

あとがき いよいよ昨年末に、図書館の問題を検討、改善する機関として、商議会専門委員会がスタートしました。この間の事情については、第2頁に詳報しているのでご覧ください。われわれ図書館員にとって期待するところ大なるものがありますが、利用者の学生・教職員のみなさんにとっては、大学改革のうごきの一環としても見のがすことのできないものでありましょう。この専門委員会の審議内容については、今後の「静修」の紙面に、できるだけのせていきたいと思っています。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 6, No. 5 (通号32号) 1970年1月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220~2238